

歴史（詳細版）

伊勢志摩には、海によって形づくられた生活の、豊かで長い歴史があります。アワビを取るための 3000 年前の道具が発掘されたことがあります。また、西暦 745 年にまでさかのぼる、伊勢志摩の大王町での魚介類の取引についての記録もあります。

豊かな自然環境、豊かな食べ物、素晴らしいシーフードから、伊勢志摩は、『御食国』の 1 つに選ばれました。これは、朝廷に食べ物を献上する責任を持つ地域ということです。8 世紀ごろに編纂された歌集『万葉集』で、若狭（現在の福井県）、淡路島（現在の兵庫県にある）と並んで、伊勢志摩は、この栄誉を授けられた 3 つの地方として詠われています。

日本固有の信仰である神道で最も重要な神である天照大神を祀った神社として、伊勢神宮はこの国の精神的な中心地とみなされています。歴史を通じて、多くの日本人は、人生に少なくとも一度はこの神社に参拝したいと願ってきました。江戸時代(1603~1867)に道が改善されたおかげで、多くの人がこの聖なる地を訪ねることができるようになりました。伊勢神宮への参拝者が増えたことで、付近には多くの茶店も作られました。伊勢神宮の近くにある、1993 年にオープンした、江戸時代の建物を再現したおかげ横丁には、この巡礼の時代の雰囲気は今も漂っています。伊勢神宮の内宮の近くにあり、伝統的なお菓子やおみやげの店が並んでいます。

九鬼嘉隆の水軍と戦国時代：

16 世紀の戦乱の時代に、九鬼家は鳥羽で名を成しました。九鬼嘉隆(1542~1600) はもともと海賊の一団のリーダーで、その後、有能な水軍武将としての地位を確立しました。1570 年代、織田信長（1534~1582）の陣営に加わりました。信長は当時、最も有力な武将でした。木津川口の戦いで、九鬼は鉄甲船を使って敵の毛利軍の攻撃を阻止し、織田軍を支援しました。

織田の死後、九鬼は次の日本の統一者である豊臣秀吉(1536あるいは1537～1598)に仕え、豊臣氏の水軍武将になりました。豊臣により、鳥羽城の築城を認められ、1594年に完成しました。海に面した、珍しい城で、鳥羽湾に直接通じる大きな門があり、海水の堀に囲まれていました。海側は黒く、陸側は白く塗られていたため、『二色城』と呼ばれました。現在、城山公園や鳥羽城跡を訪れると、城の構造壁を見ることができ、かつては城から見渡せた鳥羽湾の眺望が楽しめます。

1600年、豊臣軍と徳川家康（1542～1616）軍の間で、天下分け目の関ヶ原の合戦が行われました。九鬼嘉隆は豊臣に与したが、息子の九鬼守隆(1573～1632)は敵対する徳川軍に加わりました。

守隆は、徳川から父の助命の許しをなんとか得ました。不運にも、その知らせが届く前に、嘉隆は鳥羽の答志島で自害しました。現在、遺体の胴体はこの島に埋葬されていますが、頭部は別の場所、鳥羽城を一望できる答志島の岬に埋葬されています。

重要な航路：

徳川幕府（1603-1867）がもたらした平和な時代に、伊勢志摩とその港は交易で栄えました。これにより、この地域に富がもたらされ、生活水準が向上し、大阪との文化交流も始まりました。このような交流は、18世紀に大阪で人気があった類似の芸能に影響を受けた、安乗文楽という人形劇のような伝統によく表れています。さらに、幕府は様々な領地から年貢を徴収していましたが、伊勢志摩は、江戸の都（現在の東京）に米を運ぶ船の重要な中継港として栄えました。